

## 唐代の佛教と道教からみた外道 — 景教徒

榮新江  
(北京大學)

私は「歴代法寶記中の末曼尼と彌師訶」という一文中において、唐の大暦年間、劍南道の保唐宗の禪僧が、彼らの西天祖師が打ち負かした二人の外道を「末曼尼」と「彌師訶」と呼び、それはすなわちマニ教教祖と景教のイエス・キリストであったことを明らかにした（『中古中國與外來文明』北京、2001）。ティム H. バレットは BSOAS 第 66 卷 1 期（2003）に一篇の短文を發表し、この種のマニ教や景教を外道とみなすやり方は、敦煌本『老子化胡經』にも見えることを指摘し、さらに兩者にあり得た関係や年代の問題について検討した。本文はより廣い唐代宗教史の發展の脈絡から、景教徒がどのように道教・佛教によって外道と見なされたのかを考察する。そして、景教が唐朝の都城に傳わってから、どのように『老子化胡經』中の外道に變わったのかを詳細に跡づけることにつとめたい。この種の外道のイメージはその後の佛道兩教に利用され、いくつかの文獻ではテキスト中の景教徒の外道のイメージを踏襲し、いくつかの文獻では當時當地の宗教鬭争の情勢を出発點として、景教徒とマニ教徒を敵對する外道勢力とみなし、皆殺しにしなければ氣分が悪いといった風であった。テキストと歴史兩方面の分析を通じて、異なる時期の宗教文獻の編纂は、文獻そのものの傳承を持つばかりでなく、當時の歴史背景とも關連するものであることが分かる。佛教と道教は權威ある地位を占める正統宗教となつて、景教に對して吸收から批判へと轉じる態度を採つたのである。景教徒は自らの足場が苦しいものであつたために、時に自らを佛・道の中へと混同させていくものもあり、教徒の中には次第に「外道」から「正道」へと轉じたものもいた。

榮新江 RONG Xinjiang えい・しんこう

1960 年生

北京大學歴史系暨中國古代史研究中心教授 博士生導師 中國唐史研究會理事、副會長 中國敦煌吐魯番學會常務理事

主要著作 《歸義軍史研究》 《鳴沙集》 《中古中國與外來文明》 《敦煌學十八講》 《敦煌學新論》 ほか多數。